

巻頭言

観光研究所 所長 橋本 俊哉

第二次世界大戦直後の1947年に本学池袋キャンパスで開講された「ホテル講座」は、ホテル関係人材の育成のために社会人や他大の学生の受講も認めた、わが国の観光関連の公開講座の先駆けでした。ホテル講座の受講生は、ホテルでの実習活動をするために呼びかけて「ホテル研究会」を結成し、1964年の東京オリンピック時には、選手村でのサポートに奔走されたと聞いています。このような教育・研究の実績があって、1967年、日本の4年制大学で初となる観光学科が本学社会学部に設置され、同時に観光研究所が開設されることとなりました。

それから半世紀を超える月日が経ち、本研究所は現在に至るまで「わが国および諸外国の観光事象と関連産業全般について理論的及び実践的観点から研究するとともに、その成果をもって観光の発展に貢献する」ことを目的とした事業を展開してきました。とくに、ホスピタリティ産業や観光事業に関する3つの講座・プログラムを運営することで、多くの受講生を輩出しております。同時に、観光に関する調査研究を支援すべく、多くの特任研究員・研究員の方々を受け入れ、調査研究に取り組んでいただきましたが、その研究成果は、「観光研究所だより」においてその一端を報告していただくにとどまっておりました。本年報は、特任研究員・研究員の研究成果をひろく発信すべく創刊されたものです。

特任研究員の井上晶子氏と玉井和博氏による論考は、ともにアフターコロナの観光を考えるうえで重要な、時宜を得たテーマを取り上げて論じています。研究員の李彰美氏は韓国済州島における旅行者の動向調査の結果を過去2年間の結果と比較しながら紹介し、伊藤洋三氏は航空事業における座席販売の予約と発券の関係性を分析しています。徐翰林氏は急速な高齢化が進む中国の「シルバーツーリズム」の現状をふまえて直面する課題について論じ、田中真知氏は“幸福の象徴”であるラバーダックについて論じたユニークな論考を寄せていただきました。羽生敦子氏はフランスとカナダで、丸山宗志氏は国内外で、それぞれ今年度実施してきた調査研究の一端を紹介しています。ご寄稿いただきました特任研究員ならびに研究員の皆様に感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、「観光」というすぐれて現代的な社会行動の意味や意義を、改めて認識する好機となりました。本誌に掲載された論考からも、観光研究が多様な側面を研究対象とし、分析手法も多岐にわたることが理解できるでしょう。この小冊子が、当研究所の特任研究員ならびに研究員の皆様が取り組んでおられる研究領域をご理解いただく一助となれば幸いです。